

# 中級・上級レベルの 日本語にみられるシテシマウ

—意見と説明を述べるテキストの用例を中心に

宮部真由美

## ◆要旨

この論文では、日本語学習における中級・上級レベルに相当する日本語のテキスト（意見を述べる文、説明を述べる文）において、シテシマウがどのように用いられているかについて述べていく。分析の結果、これらのテキストでシテシマウは初級の日本語教科書では学習していない意味・機能を担うものとして用いられていることがわかった。また、その際のシテシマウは、基本的な意味（文法的な意味）は限界達成を表わすものの、意見を述べること、説明を述べることというテキストの特徴によって、それぞれのテキストにおけるテキスト的な意味を表わしていることがわかった。

## ◆キーワード

シテシマウ、中級・上級レベルの日本語、意見を述べるテキスト、説明を述べるテキスト

## ◆ABSTRACT

It is analyzed how the verb form *shiteshimau* is used during Japanese learning in intermediate- and advanced-level Japanese texts that describe opinions and explanations in this paper. The analysis showed that the meanings expressed by the verb form *shiteshimau* in these texts were not learnt in the beginner's class Japanese textbook. The verb form *shiteshimau* expresses telicity as its basic meaning (grammatical meaning). In addition, based on the characteristics of texts describing opinions and explanations, it expresses the textual meanings in each text.

## ◆KEY WORDS

the verb form *shiteshimau*, intermediate- and advanced-level Japanese language, texts of describing opinions, texts of describing explanations

## A Study about *shiteshimau* in Japanese Texts for Intermediate and Advanced Learners of Japanese

MAYUMI MIYABE

# 1 はじめに

中級、上級レベルの日本語学習者にとってシテシマウは適切に使用することのできない項目であるといわれる。2節で述べるように、『JCK作文コーパス』（日本語母語話者と中国人と韓国人の上級日本語学習者各20人が3つのテーマについて書いた作文を集めたもの）におけるシテシマウの産出をみると、3つの作文とも母語話者よりも学習者のほうが少なく、特に意見を述べる作文における産出の比率差は大きい。シテシマウは初級で学習する文法項目であるにもかかわらず、上級の日本語学習者でも十分に使用できていないことがわかる。

なお、シテシマウが初級だけの指導では不十分であることに関して、発話データを使用した砂川（2017）の調査がある。ただし、砂川（2017）における言及は、2.4で述べる「話し合い」のテキストによるもので、本稿が分析しようとしている「論述」のテキストとは異なるタイプのテキストである<sup>[註1]</sup>。

本稿では、『JCK作文コーパス』で作文の課題となっていた意見を述べることと説明を述べることを、中級、上級レベルの学習者にとって必要となる能力であると仮定し、これらのテキストにおいてシテシマウがどのように用いられているかを具体的に示すことを目的とする。

## 2 『JCK作文コーパス』におけるシテシマウの使用状況と問題のありか

### 2.1 3つの作文における使用状況

『JCK作文コーパス』を利用して日本語母語話者ならびに日本語学習者のシテシマウの使用について調べた。『JCK作文コーパス』はウェブページ<sup>[註2]</sup>に「日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文を収録しています。（途中省略）…本コーパスには、説明文（自分の故郷について）、意見文（晩婚化の原因とその展望について）、歴史文（自分の趣味（昔から続けていること）について）、という3つのタイプの作文があります。それぞれの作文は、2000字という比較的長いものです」と説明がある。また、作文の執筆者はいずれも大学

生で、日本語学習者はJLPTのN1合格者および合格相当の力を持っていることが確認されているとある。『JCK作文コーパス』におけるシテシマウの使用数は表1<sup>[註3]</sup>のようであった。

表1 『JCK作文コーパス』におけるシテシマウの使用数（※カッコ内は使用人数）

	意見を述べる作文	説明を述べる作文	経験を述べる作文	計
日本語母語話者	55 (18)	18 (9)	38 (17)	111
中国人学習者	7 (3)	6 (2)	20 (12)	33
韓国人学習者	11 (8)	5 (3)	23 (10)	39

全体的に日本語母語話者のほうがシテシマウを使用することが多く、学習者は少ない。日本語母語話者は意見を述べる作文で最も多く用いており、日本語母語話者と学習者の使用比率をみると、この作文での差が特に大きい。学習者は3つの作文のうち、経験を述べる作文での使用が最も多く、日本語母語話者との使用比率の差をみると、ほかの作文と比較して、経験を述べる作文での差は小さい。この論文では各作文の特徴と照らして、シテシマウについて具体的にみていくことにする。

### 2.2 過去形、文末での使用状況

初級教科書で学習するシテシマウは「完了」と「感慨」の意味を表わす（グループ・ジャマシイ1998）ものとして取りあげられている。『みんなの日本語初級II 翻訳・文法解説 英語版』（1998:26-27）には次のような説明があり、用例もあげられている。

- (1) Vて-form しまいました is an expression which emphasizes that an action or event has been completed.  
⑤ シュミットさんが持って来たワインは全部飲んでしまいました。  
⑥ 漢字の宿題はもうやってしまいました。
- (2) This expression conveys the speaker's embarrassment or regret in a difficult situation.

- ⑧パスポートをなくしてしまいました。
- ⑨パソコンが故障してしまいました。

また、『げんき教師用指導書 [第2版]』(2012: 100)にも次の2つの意味があがっている。

- (3) 「すべて～する」の意味での「～てしまう」
- (4) 後悔の意味での「～てしまう」

先にあげた『JCK作文コーパス』の経験を述べる作文でのシテシマウは「完了」や「感慨」の意味のものがほとんどであった。(1)と(2)にあげられている用例がそうであるように、初級教科書では個人の経験を話すことが多いが、経験を述べる作文でのシテシマウの使用はこの延長にあるものといえるだろう。

上述のように、初級教科書では個人が経験したことを話す場合が多いため、シテシマウは過去形で使用されることがほとんどである。また、初級教科書では文末の述語の位置で用いられる場合が多い。この点を『JCK作文コーパス』の作文について確認した(表2)。

表2 『JCK作文コーパス』におけるシテシマウの過去形、文末での使用数と割合

作文 (用例数)	日本語母語話者			中国人学習者			韓国学習者		
	意見 (55)	説明 (18)	経験 (38)	意見 (7)	説明 (6)	経験 (20)	意見 (11)	説明 (5)	経験 (23)
過去形 (割合) [註4]	13 (24%)	4 (22%)	15 (39%)	2 (29%)	4 (67%)	11 (55%)	5 (45%)	5 (100%)	13 (57%)
文末 (割合)	20 (36%)	4 (22%)	17 (45%)	6 (86%)	6 (100%)	17 (85%)	7 (64%)	2 (40%)	11 (48%)

学習者<sup>[註5]</sup>の場合、経験を述べる作文に限らず、日本語母語話者と比較すると過去形を用いる割合が高いことがわかる。また、シテシマウが用いられている場所も文末の場合が多く、学習者の使用はより基礎的、あるいは単純な位置

での使用となっている。特に中国人学習者は、シテシマウの8割以上が文末での使用であった。一方で、日本語母語話者についてみると、シテシマウの使用が過去形や文末に限られないことがわかる。実際に、非過去形や中止形、連体修飾などでも用いられていた<sup>[註6]</sup>。

意見や説明を述べることを考えた場合、アカデミックレベルのテキストではより一般的なものとして述べることが求められる。非過去形が用いられているということから、時間的な限定をうけないことがらが述べられていると考えられるが、『JCK作文コーパス』の意見や説明を述べる作文において、日本語母語話者の作文で非過去形が用いられるのは、これらの作文が個人や個人的なことから離れ、一般的なことがらとして述べていくものであるというテキストの特徴が関係しているといえるだろう。これらのことを考えあわせると、学習者が初級で学習したシテシマウの意味・用法では、中級、上級レベルの産出において十分に対応ができていないことがわかる。

### 2.3 学習者のシテシマウ

意見を述べる作文では、中国人学習者は3名(用例数:7例)がシテシマウを用いていた。韓国学習者は8名(用例数:11例)であった。シテシマウを使用していた学習者のなかには中級、上級レベルのシテシマウ(初級レベルで学習していないシテシマウ)について理解していると思われる用例もあったが、使用者数が少ないこと、つまり、非用が目立つ。

次に説明を述べる作文についてである。中国人学習者は2人(用例数:6例)、韓国学習者は3人(用例数:5例)しかシテシマウを用いていない。これら11例の用例は、中国人学習者の2例<sup>[註7]</sup>をのぞき、過去形での使用であった。また、非過去形の2例も第三者の発話部分に用いられており、未来時におけるできごとの限界達成を表わすものであった。いずれも初級で学習するシテシマウであるといえる。

### 2.4 文法的な意味とテキスト的な機能

ここでは文法的な意味とテキスト的な意味・機能との関係について確認しておく。例えば、「スルーシテイル」に関して、工藤(1995:34)は「話し手が、

複数の出来事を1つの事件としてまとめあげながら伝達するとすれば、その複数の出来事成立の時間的順序性を表し分けなければならない。スル（完成相）は、時間的に限界づけて把握するがゆえに〈継起性〉を表し、シテイル（継続相）は、時間的に限界づけずに把握するがゆえに〈同時性〉を表す」と述べている。仁田（1996:20-21）は「語り物」のテキストを分析し、「動きの述語の完結相過去形が、継起的に生起していく出来事を順次述べていくことで、語り物の主筋を展開させているのに対して、状態述語（テイル形を含めて）の過去形（および非過去形）は、出来事の生起時に同存する状態を表すことによって、主筋を展開していく継起的出来事の背景的状况や構成要素への説明的情報を付与することになる」と述べている。つまり、これらでは、スルとシテイルが、「完成相」と「継続相」という文法的な意味の違いをもちながら、特定のテキストに用いられた場合に、「継起性」・「継起的出来事による物語の展開」と「同時性」・「背景的状况・説明的情報の付与」というテキスト的な意味・機能をもつことが述べられている。

また、仁田（1996）は、図1のようにテキストを分類している。そして、「論述」のテキストの特徴について「論述では、書き手・話し手は、先行する文によって差し出された出来事・事柄を証拠・論拠にしなから、叙述を展開していき、有標のモダリティ形式で表される判断を形成する」（p.19）と述べている<sup>[註8]</sup>。

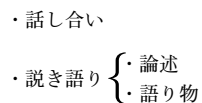


図1 仁田（1996）によるテキストの分類

しかし、必ずしも「有標のモダリティ形式」によって判断が表わされるわけではないだろう。仁田（1996）の「有標のモダリティ形式」とはカモンレナイ、ニチガイナイ、ハズダなどを指すものと思われる。確かに、「有標のモダリティ形式」が用いられることで、そこに書き手の判断が述べられていることが明示的になるといえるが、スルの形でも判断を述べることはできる。また、形容詞述語や名詞述語の場合もあるだろう。本論文の分析結果を先に述べると、シ

テシマウも仁田（1996）の引用にある書き手の「判断を形成する」部分に用いられると考える<sup>[註9]</sup>。先にアカデミックレベルの意見や説明を述べるテキストでは、個人や個別的なことから離れ、一般的なことからして述べられるという特徴について述べたが、4節と5節でみていくようにシテシマウが「判断を形成する」部分に用いられるというのはこのようなテキストとの関連が大きいといえるだろう。

### 3 分析対象とするテキスト

シテシマウの用いられかたについて、意見を述べるテキストに関しては『JCK 作文コーパス』の日本語母語話者の用例、説明を述べるテキストについては中学校教科書（理科と社会科）の用例を用いて分析していく。説明を述べるテキストに中学校教科書を用いるのは、『JCK 作文コーパス』では用例数が少ないため十分な分析ができないこと、中学校教科書は対象は中学生であっても『JReadability 日本語文章難易度判別システム』<sup>[註10]</sup>を利用して難易度を判定したところ中級後半から上級後半レベルの結果を示したこと<sup>[註11]</sup>、中学校教科書で扱われている内容が基礎的なものであり、専門的すぎないことなどが理由である。中学校教科書のシテシマウの用例数は表3のようであった。表3の用例数からは教科書1冊（約250ページ）に現れるシテシマウは多くないことがわかる。

表3 中学校教科書（理科と社会科）のシテシマウ<sup>[註12]</sup>

教科書	理科（1～3年）	地理	歴史	公民
用例数	23	7	2	18

また、本論文ではシテシマウの基本的な意味を梁井（2009:21）が述べるように「限界達成一般を表す形式」とし、第一義の意味としては「明示的な運動の終わり・完結」（宮部2018）を表わすと考える<sup>[註13]</sup>。

## 4 意見を述べるテキストにおけるシテシマウ

意見を述べるテキストのシテシマウはほとんどのものが次のような文で用いられていた。

- (5) 最後に、経済的な理由から結婚を後回しにしてしまうケースもあります。(j04-2)
- (6) また、結婚して子供を儲けた時に、養育費をねん出するほど余裕が無いという理由で結婚を控えてしまうこともあるだろう。(j09-2)
- (7) また単純に、中学高校と、異性の知り合いができる機会が極端に狭められるため、恋愛に至る機会が少なくなってしまうことも恋愛経験の低下につながっているでしょう。(j05-2)
- (8) キャリアアップに邁進したいと思う女性が増えた結果、その邪魔となる出産、そして出産を求められる可能性のある結婚にも踏み切れない人も増加してしまったのであろう。(j06-2)

(5)～(8)のシテシマウの形の動詞(あるいは動詞を含む述部)は運動の終わり・完結といった限界達成を表わしている。そのうえで(5)～(8)をみると、いずれも文の構造として、原因・根拠—結果・結論という関係がみられる。点線部分に原因・根拠が述べられており、実線部分に結果・結論が述べられている。実線部分の結果・結論が述べられている述部にシテシマウの形が用いられている。

こうした原因・根拠—結果・結論という関係が1文内におさまらない場合もある。先にあげた(7)には(9)の文がつづく。(9)の下線部分の原因・根拠となっているのは、(7)に提示した1文全体である。

- (9) 高校時代の恋人と結婚するとか、卒業して何年もたった後に同窓会で再会した人と結婚するとか、そういったことがなくなってしまうのです。(j05-2)

同様に、次の(10)では原因・根拠が述べられているのは点線の複数の文の部分である。

- (10) また、時代がかわったとも言えるだろう。まず、モラトリアムの伸展が考えられる。一つに進学率の上昇。多くの人びとが中学校を卒業後は高校に進学し、高校卒業後も大学に進学するようになった。その時点で大学を卒業するまではアルバイト程度の収入しか得られない。収入が少ないことは結婚するうえで大きな障壁となるだろう。そして、もう一つにバブル崩壊後の就職難。長い年月と高い学費までかけて大学まで出たのに、十分な収入を得ることが難しくなってしまったのだ。(j14-2)

さらに、(10)ではこのあとに(11)の文がつづく。(11)を単独でみれば、実線部分に対する原因・根拠が点線部分に書かれているが、この点線部分は(10)の内容をまとめたものである。

- (11) こうした日本全体の進学率の上昇や景気悪化に伴う就職難によって1人前の家庭を持てる人間になるための期間が伸びてしまった、つまりモラトリアムの伸展によって晩婚化は進んでいるのだらう。(j14-2)

次の(12)も実線部分の直接の原因・根拠は点線部分である。しかし、この点線部分も「それにより」でうけた「こういった傾向により……のでは無いかと思います」によって導かれる意見(結果・結論)であり、こうしたいくつかの原因・根拠についての結果・結論、そしてその結果・結論が次の原因・根拠となるように、書き手の論理を展開させていく段落構成となっている。

- (12) こういった傾向により、女性は結婚するよりも、仕事や自分のやりたいことを好きに取り組めることの方に重きを置くようになったのでは無いかと思います。それにより、女性は二十代の時に結婚・出産をするような余裕がなく、仕事や趣味の方を優先してしまい、結果晩婚化



が進んでいるのだと思います。(j16-2)

一般に意見を述べるテキストではなんらかの問題点が示され、それがどのような結果を引き起こすのか、そして、それらをどのように解決していくのかということが述べられる。この節でみてきたシテシマウは原因・根拠—結果・結論の関係を表わす構文(段落)における結果・結論を述べる部分に用いられていたが、意見を述べるテキストという性質を考えると、シテシマウは書き手の「判断を形成する」部分に用いられているといってもいいだろう。さらに、スルの形ではなく、シテシマウの形を用いることによって、結果・結論が書かれた部分であることを明示的に示している。そして、この結果・結論部分であることを明示的に示す(=強調する<sup>[註14]</sup>)という点で、シテシマウは意見を述べるテキストにおける、テキスト的(談話的)な機能を担うものとして用いられているといえる。また、以上のことから、意見を述べるテキストにおけるシテシマウの使用は日本語学習者にとって初級で学習した限界達成を表わすという文レベルの理解では不十分となるものであることがわかる<sup>[註15]</sup>。

## 5 説明を述べるテキストにおけるシテシマウ

説明を述べるテキストでもシテシマウはテキスト的な機能を担っている。表4はシテシマウが過去形で用いられている数と割合を調べたものである。

表4 中学校教科書(理科と社会科)のシテシマウの過去形の使用数と割合

教科書 (用例数)	理科(1~3年) (23)	地理 (7)	歴史 (2)	公民 (18)
過去形 (割合)	5 (22%)	1 (14%)	1 (50%)	2 (11%)

用例数の少ない歴史の教科書をのぞくと、過去形での使用は多くない。つまり、教科書の書き手は時間的限定をうけないことがら=一般的なことがらとして述べているといえる。

シテシマウの用いられかたとして特徴的であったのは公民と地理の教科書の

用例であった。(13)、(14)は公民の教科書の用例である。シテシマウの形の動詞をみると、いずれの動詞(あるいは動詞を含む述部)もその語彙的な意味として否定的な意味をもつものであるが、これは各教科書において、あるテーマについて説明していきなかで、その前の部分の説明に対して、シテシマウを用いることによって際立たせる(=強調する)ためであると考えられる。

- (13) 人々は事故や病気で、あるいは退職や失業者となることなどで、生活の維持が困難になることがあります。このような事態に備えて人々は貯蓄をし、年金保険や生命保険に加入しようとします。しかし、もしすべての人が自力で将来への不安に備えなければならないとしたら、高所得者はじゅうぶん備えられても、低所得者には困難なため、大きな格差が生まれてしまいます。(公民)
- (14) 憲法改正の手続きは、このように憲法を現実に対応したものにしたり、条文の表現を改めたりするために定められています。同時に、憲法を最高法規として安定させるために、その手続きは、衆議院・参議院それぞれの総議員の3分の2以上の賛成で国会が発議(提案)したのち、国民投票にかけ、過半数の賛成を得なければならないというきびしい条件が課されています(96条)。憲法を絶対不変のものと考えてしまうと、時代とともに変化する現実問題への有効な対応をさまたげることもなりかねませんが、あまり安易に改正されれば憲法の安定性がそこなわれてしまうことも考えられます。(公民)

(13) では、シテシマウを含む「しかし、もしすべての人が……」の文の前部分では年金保険や生命保険への加入を肯定的に説明しているが、シテシマウを含む文ではこうしたことに対する否定的なことがらが述べられている。また、(14) では憲法改正の手続きについて説明しており、改正は憲法で保障され、改正までに厳しい条件があることが述べられている。そして、シテシマウを含む最後の文で、安易な憲法改正に対する批判が述べられている。

また、(15) のように、文脈から望ましくないもの・否定的なものとして用いられている場合もある。「お金の価値を変える」という内容は肯定的でもあ

り得るものであるが、(15)の文脈では否定的な内容として表わされている。

- (15) 商品の値段がどんどん上がるインフレや、商品の値段が下がり続けるデフレのいずれの状況も、お金の価値を変えてしまいます。(公民)

以上の点は地理の教科書の用例((16)、(17))も同様であった。

- (16) また、温暖化による海面の上昇で水没してしまう危険のある島もあります。(地理)

- (17) これは、この地域が永久凍土という凍った土の上にあるので建物から出る熱が永久凍土をとかし、建物がかたむいてしまうことを防ぐための工夫です。(地理)

説明を述べるテキストでは、通常、説明すべき内容が肯定的に述べられていく。表3に示したように教科書1冊に用いられているシテシマウの数が多いことを考えると、公民や地理では、日本社会や世界のことを説明していくなかで望ましくないこと・否定的なことがらがあるが、シテシマウの形を用いることによって効果的に強調されているといえる。また、公民と地理の教科書の書き手は、一般的な説明を述べていくテキストにおいても、ある立場からの「判断を形成する」文にシテシマウを用いているといえるだろう。

一方で、理科の教科書では動詞の語彙的な意味も、また、文・文脈の意味も否定的ではないものが多くみられた。(18)、(19)のような用例である。シテシマウは単に運動の終わり・完結を表わす(時間関係をとらえる限界達成を表わす)ものとして用いられていた。

- (18) 太陽がのぼって気温が上がってくると、霧は消えてしまうことが多い。(理科)

- (19) 図2のように、ポリエチレンぶくろの中の空気をぬいていくと、ポリエチレンぶくろはつぶれて、たがいに密着してしまう。(理科)

これは、理科の教科書では自然現象や実験について正確に説明する必要があるためであり、書き手の立場から述べる必要があるとされないテキストであるためであると考えられる。同様に、歴史の教科書ではシテシマウの使用自体が少なかったが、これは基本的に歴史の記述に書き手の立場が関与することはないということだろう。

## 6 スルとシテシマウ

3節で述べたように、シテシマウはスルの形に対して限界達成を明示的に表わす形である。つまり、スルの形ではなく、シテシマウを用いるのは、金水(2000: 68)が述べるように「シテシマウはスルの限界達成をさらに前景化した表現」であるためである。4節と5節の分析では、シテシマウが「判断を形成する」文に用いられることがわかった。そして、その場合の文はほとんどの場合が望ましくないこと・否定的なことを表わす内容であった。意見・説明を述べるテキストにおける望ましくないこと・否定的なことを表わす内容は、書き手の判断がはいったものである。つまり、望ましくないこと・否定的なことを表わす内容の部分にシテシマウが用いられるということは、「判断を形成する」文に用いられるということに合致しているといえる。また、書き手の判断がはいる(「判断を形成する」文に用いられる)ということは、先ほど述べたシテシマウの文が「前景化」するということにも合致するものだろう。

## 7 おわりに

本論文では意見を述べるテキストと説明を述べるテキストにおいてシテシマウがどのように用いられているかをみてきた。意見や説明を述べるテキストは、書き手の個別的な経験を述べるものではなく、一般的なこととしてことがらを述べていくテキストである。そこに述べられることがらは時間的限定をうけない(脱テンズの)ことがらが多く、シテシマウは非過去形で使用されていたり、連体修飾の位置に用いられていたりしていた。そして、シテシマウは限界達成を表わし、さらにテキスト的な機能を担うものとして用いられていること

がわかった。

一方、『JCK作文コーパス』の意見と説明を述べる作文において学習者がシテシマウをあまり用いていない理由は、これらの作文が初級で学習したシテシマウとは異なる意味や異なる位置でシテシマウが用いられるテキストであったためであるといえる。つまり、初級教科書で学習するシテシマウは個別的な経験を述べる文に用いられており、学習者は文レベルにおいて「完了」や「感慨」といった意味を理解すればよかった。しかし、中級、上級レベルのテキストでは個別的なことがらではなく、より一般的なことがらとして述べられる。そのため、こうしたテキストの違いを理解し、そして、このようなテキストに用いられるシテシマウに対してテキスト（文章・談話）レベルでの理解をしていく必要がある。また、このことには意味的な点だけでなく、非過去形や文末以外でシテシマウが用いられるという形態的、構文的な点も関係していた。

今回の分析に用いたテキストは意見や説明を述べるということに特化したものであったが、多くの場合はこれらが複雑にくみあわさったものである。今後、この論文でわかったシテシマウの意味や機能についてどのように教育現場に応用していくかということについて考えていきたい。

〈一橋大学〉

#### 付記

本稿は2017年11月26日に朱鷺メッセ（新潟）で行なわれた日本語教育学会秋季大会における口頭発表「中級・上級レベルの日本語学習者にとってのシテシマウ—意見と説明を述べるテキストの用例を中心に」に加筆・修正を加えたものである。

#### 注

[注1] …… テキストの分類に関しては2.4で述べる。

[注2] …… <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>（2018年3月16日確認）

[注3] …… 表1では『JCK作文コーパス』の意見文、説明文、歴史文を、意見を述べる作文、説明を述べる作文、経験を述べる作文と言いかえている。また、以下の本文でも言いかえたほうを用いる。

[注4] …… 割合は、母語話者、学習者のそれぞれの作文の用例数に対するものである。

例えば、日本語母語話者では意見を述べる作文で55例のシテシマウが用いられている。このうち過去形は13例であるので、 $13 \div 55 = 0.236$ （24%）、また、文末での使用は20例であるので、 $20 \div 55 = 0.363$ （36%）のように計算をしている。

[注5] …… 分析対象である『JCK作文コーパス』の学習者のなかには、十分に産出ができる学習者も含まれていると思われる。

[注6] …… 庵・宮部（2017）は『JCK作文コーパス』のデータを用いて、動詞のテンス・アスペクトの形について分析している。これらの形がテンス的な意味を表わさない（時間的限定をうけない）場合、上級の日本語学習者でも適切に用いることが困難であることが述べられている。学習者の作文に非過去形での使用が少ないことにはこうした点も関係しているのだろう。

[注7] …… 次のような用例であった。

①青年はサワラ姫に“助けておくれ、私は水分の宝玉を失った、それがないと、私は水死してしまふ。どうかお助けておくれ”と哀願した。（C28-1）

②だが、隣の爺さんが笛を出そうと思う青年を止めました。“その笛、あげちゃあかんぞ”と“もし奴らにあれをあげたら、奴らは離れてしまふだろ？”を云った後自分ちに帰った。（C28-1）

[注8] …… 一方、「語り物にあっては、有標のモダリティ形式（さらに言えば、モダリティそのもの）は、モダリティの顕在化しない文に対して、異なったテキスト形成機能を有している」（仁田1996:22）と述べ、それがどのような「テキスト形成機能」であるかの分析が行なわれている。

[注9] …… この「判断を形成する」部分とは、本稿で分析する意見や説明を述べるテキスト（「論述」のテキスト）においては、書き手の意見（主張）が述べられる部分であると、述べていく。

近藤（2016）は「話し合い」のテキストである『名大会話コーパス』における「現実世界で既に実現した事態」（p.53）を表わすシテシマウ（過去形）を分析し、「話し手の評価的な態度」（p.50）を表わすことを述べている。本稿では「論述」のテキストのシテシマウ（非過去形）が書き手の「判断を形成する」部分に用いられることを、このあとの分析で述べていく。

[注10] …… <https://jreadability.net/>（2018年3月16日確認）

[注11] …… 『jReadability 日本語文章難易度判別システム』では一度に20,000字までしか判定できないため、各教科書の任意の部分を選択して解析している。

[注12] …… 用例数は地理、歴史、公民は各1冊分、理科1年生～3年生の3冊分の合計である。

[注13] …… この意味は先行研究の「完了」の意味に相当する。また、2節で述べた「感慨」は、本稿では第一義の意味から派生する意味と考えている。[注15]も参照してほしい。

[注14] …… これらの部分はスルの形を用いたとしても非文ではない。その部分のスルの形ではなくシテシマウの形を用いるという点で「結果・結論が書かれた部分であることを明示的に示す」といえ、このことは、言いかえれば「強調する」



ということでもあるだろう。

[注15]…… シテシマウの「感慨」(グループ・ジャマシイ1998)の意味に関してであるが、シテシマウの形となる述語の意味は多くの場合、望ましくないもの・否定的なものを表わしており、このことが「感慨」といった意味と関係していると思われる。次節の説明を述べるテキストの場合も同様である。詳細な分析は今後の課題としたい。

---

## 参考文献

- 庵功雄・宮部真由美 (2017)「正確で自然な時間の示し方」石黒圭(編)『わかりやすく書ける作文シラバス』pp.19-36. くろしお出版
- 金水敏 (2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子(著)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』pp.1-92. 岩波書店
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ (1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 近藤優美子 (2016)「テシマッタの使用制約—なぜ「目的地に到着してしまいました」とカーナビは言わないのか」『日本語教育』164, pp.50-63. 日本語教育学会
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2012)『げんき教師用指導書 [第2版]』ジャパンタイムス
- 砂川有里子 (2017)「中級以降で指導が必要なテシマウの用法について—学習者と母語話者の使用状況調査に基づく考察」『日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究』pp.169-184. 科学研究費報告書(藤田保幸代表 課題番号: 26284064)
- スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語初級II 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク
- 仁田義雄 (1996)「語り物の中のモダリティ」『阪大日本語研究』8, pp.15-27. 大阪大学
- 宮部真由美 (2018)「シテシマウの基本的な意味とテキスト的な意味との関わり」『人文・自然研究』12, pp.52-69. 一橋大学大学教育研究開発センター
- 梁井久江 (2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5(1), pp.15-30. 日本語学会

---

## 用例採集資料

- ・『JCK作文コーパス』(<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>)
  - ・『新しい科学1年～3年』(東京書籍)、『中学生の地理』(帝国書院)、『新しい社会 歴史』(東京書籍)、『新しいみんなの公民』(育鵬社)
- (いずれも平成23年度検定済み教科書)